の意見を語り合い、活動方針を決めた。そこで、「子ども食堂＝施し」ではなく、労働対価としての食事提供という新しいスタンスで取り組むことが未来につながると判断。「対価方式によって食堂そのものを長期継続的に行えることを目的に、『食育→食農育』と『社会活動』という教育も同時に行い、食に対する価値を少しでも多くの子どもたちに感じてもらえることを目指している。食事を通じて感謝の気持ちを持ってもらい、食農育の重要性を訴えることで一次産業を支え、労働の対価としての報酬（食事）によって社会勉強につながる。私自身、賛同してくれたさたけん家、関係者にたいへん感謝している」と話す。

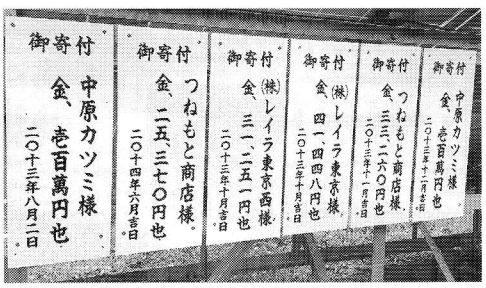
また今年９月には、主催・福島農民連産直農業協同組合、後援・吹田市、吹田市教育委員会、米の専門店つねもと商店で、「福島を知る」～吹田の中高生はどう感じる～（仮称）１泊２日の研修旅行を企画。７月末配布予定の市報で参加者を公募し実施することになっている。常本さんらの目的は３つ。①今後顕著になる自治体消滅や、少子高齢化が10年先の状態に進んだ南相馬市などの現状を見てもらい、これからの日本の方向性を感じてもらう②太陽光発電、小水力発電の施設見学で、再生可能エネルギーの有効性を知ってもらう③農家民宿で宿泊を予定しており、農業の実情・福島のいま・震災経験などの生の声を情報共有する。

おにぎりの写真が海外の子どもたちを救った

常本さんは「参加する中高生の志向のひとつになることが、その後の学びを変化させ、最終的に社会貢献につながると考えている」と指摘する。一方で、「生産地とどうつながるか。多くのコメ屋さんはそこまで考えて行動していない。県や農協だけでなく、生産地域の協力や地元自治体の協力などさまざまな方法があるので、活用してほしい」という。

「主食原料を扱うコメ屋だからこそ取り組める地域支援活動であり、その中でコメの大切さ、農家さんの大切さを少しでも消費者に感じてもらえるよう、また激減しているコメ屋が地域の食糧庫としての責任を持つことで、われわれの存在価値が変化するきっかけにならないか」と話す常本さんは、米穀店として取り組める社会貢献活動アウトラインを自ら作製し、自身のＨＰで公表している。「全国の同業者に参考になるようなアイデアになれば使ってほしい」と呼びかける。

なお、現在２カ所に提供しているコメの年間コストは原価にして３万円弱。原資は店頭持ち込み精米やコメ糠の一見さんに寄付金としてプールし捻出。この取り組みまでは、原資を福島県市民出資型太陽光発電所に寄付をしていたそうだ。



毎年寄付を続けている